
胡桃坂

東風方 胡蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡桃坂

【Nコード】

N4920Q

【作者名】

東風方 胡蝶

【あらすじ】

超短篇集です。関連性は愈々あってありません。

部屋

彼は今日も部屋に居る。

彼にとつてのその部屋は全世界。全宇宙。

何をするにしても、全ては自分に返ってくる、なんてことも嘗有り得ない、殆ど誰からも干渉され得ない、住み心地の良い、部屋の筈であつた。

然し彼が鍵をかけたおいた筈の扉は何とも無しに突然開かれ、そこから土足で入り込むは、猫背で瓶底眼鏡をかけ、黒い、破れた随分と古びたのスーツを着た、余りに年寄り臭い若い男である。

「やあ。」

と言つてのけた男は床に座り込む。

「君さあ、何時までそこにいるつもり？」

と続けて彼を見ず男は尋ねる。

暫しの沈黙の後「ああ、そうか。」と勝手に納得した男は、またもや突然立ち上がり帰つて行つた。

そういえば、彼此どのくらいここに居るのだろうか。

外に出ようと扉を開けようとしても外側から鍵をかけられているらしく、外に出ることは出来ない。

そういえば、この部屋の外はどうなつていたのか。

外に直接出られるのか、この部屋が家の中の一室なのか。

それすらわからない。

窓も電気も無いこの真暗な部屋は、果たして部屋と呼べるのだろうか。

暫時茫然としていたが、それを打ち破るかのように大きな物音がした。

何があつたのかと確認しに行くが、音のあつた方向へ行けども行

けども、壁が無い。

私は余り超自然等の類は信じない質であるが、こればかりはそれを疑わざるを得なかった。

随分と、この何も無い部屋を歩いた筈だ。

つい先程までは広さとしてはごくごく普通の割と狭い部屋で、そこらには小物すら落ちていた筈だ。それなのにも拘わらず今は壁すら見当たらない。

然し、疲れが一向に来ない。

寧ろ、歩きたいと思って歩いているようであった。それは全てが自由であったが、全てへの制限であった。

かの男が年寄りに尋ねる。

「『死』とは何でしょうかね。」と。

年寄りは答える。

「一生のロマンだ。」と。

死とはロマン。

延々続く夢物語。

死とは帰結。

一生のドラマの走馬灯。

男がまた年寄りに尋ねる。

「では『生』とは何でしょうかね。」と。

年寄りはまた答える。

「変幻自在なロマンだ。」と。

物語は後からいくらでも変えられる。

後で手を加えてさえやれば、どんな完結だって望めるのである。

恐らくは孤独死であろう、白骨化した遺体があるとある団地の一室で発見された。

遺骨は供養程々に集団墓地に投げ捨てられた。

夏電

また寝ているんだな。辟易した彼女はまた、今日も言う。

彼此どれぐらいこのような文字通り、起臥するだけの生活が続いているのか、考えても見なかった。

あれはどれくらい前のことであろうか。

それこそ米作り一筋、先祖代々米農家の我が家を逆遇した、減反政策。

始めの内は奨励金も出されたし、転作も試みた。

然し、次第に奨励金も出されることは無くなり、慣れない別の作物への転作意欲も削がれていった。

農神様でさえどうすることも出来なかったたのである。この政策は、辛くともそれはそれであった、我が小村の活気すら削ぎ、深閑とさせた。

「まんず、今度は橋んとこのおんちゃんさ死んだんだど」

主婦達の噂話が外から聞こえる。きつと、事実であろうが、噂で終わって欲しい。橋の袂のは古くからの友人だ。

そつえば最後に会ったのは一昨日、将棋を差した時だったか。普段から余り話す奴では無かったが、何時も戯けた様なことをしては、私を笑わせる様な奴であった。だが、あの日は違った。何処か余所余所しく、今までに奴と将棋を差して勝った試しの無かった俺が立て続けに勝ったのであったから。

暮は何時もまず私が勝つのだが、奴は直ぐに悔しさが顔に出る奴であった。だが、あの日は得意の将棋で負けても、負けても、ずつと微笑んで私を見ていた。

相当切り詰められていたのだろうか。奴の妻もつい先日倒れ、そのまま亡くなったと聞く。良い棺すら買ってやれないと嗚咽していた、あの時の奴の顔が忘れられない。

我が家の家計も火の車だ。と妻が日毎言う。だが、食材等も今のところ何とかしてくれている。どうにかしなくては考えるも、何の案も浮かばず、毎日寝てばかりいては妻に注意されるが、流石心中察してと言ったところか、余り辛く当たってくることは無い。

妻と結婚したのは丁度、廿四年前の夏、戦後間もなく生活は苦しかれど、それはそれで幸福な日々を過ごし、二年後には娘も生まれた。その時がもしかしたら幸せの絶頂期であったのかもしれない。

娘が漸く十歳になった夏の頃であつたろうか、何時もの様に川に遊びに行つてくると言い、家を飛び出して行つた娘はそのまま帰つてくることは無かつた。

それから十二年間で何とか気持ちの整理が付いた矢先であつた。妻は良くしてくれている。本当に感謝している。それなのに、何も出来ない自分の無力に愈々嫌気がさす。

そつといえば、今日は結婚記念日だつた。

娘が生まれた時に買った、懐中時計があつた。今では止まっているし、もう使うこともあるまい。あれを売って久しぶりにケーキでも御馳走してやろう。

私はちよつと出掛けて来る。と言つて家を出ようとしたが、無言で妻に止められた。その時の妻は何時もの快闊さを微塵も感じさせない、何処か淋しげな表情であつた。気をつけてと何処か余所余所しく言う妻は新婚の頃のように、初々しく、可愛らしかった。

外に出ると風鈴の音がそこそ暑い外を涼しくしてくれているようであつた。まだ日は高く無く、調度以前であれば畑仕事を終えて

家に帰ってくる時間であつたらう。

幾許か歩いたろうか、山を越え、街に着いた。日は燦燦と照り、益々暑くなつてきた。

持ってきた懐中時計を握り締め、街を歩く。

歩いていると古びた質屋が一件目に付いた。店主はもう、80は行っているであらう爺さんで、人の良さそうな感じが良くわかる。

そこで幾らか金を借り、洋菓子店の Saint Germain en Laye に向かった。以前何度か妻と来たことのあるこの店のショートケーキは甘過ぎず、かといって甘くない訳で無く、苺の酸味と甘味を引き立たせたような、良い塩梅のケーキである。

若かりし日の妻のようだとふと笑い、ショートケーキを3つ買う。それから村に入ると日が少し傾き始めており、夕飯時の良い香がとても心地好かつた。

私は走つて家へ帰つた。

普段ならこの時間にもなれば家の電気は点けられ、夕飯の匂いがしていた筈なのだが、今日は電気が点いていなかった。

昼寝でもしているのかと、たまには料理でも作つて驚かせてやろうと台所に立つ。味噌汁と御飯と焼き目刺しだけであるが、日頃の感謝もあるので、慣れない料理をする。

一通り出来たので妻を呼ぼうと寝室へ向かうが、いない。が、妙に片付いているようにも思えた。

居間で寝ているのかと居間に向かうも、妻の姿は見当たらない。代わりにちゃぶ台の上には一通の手紙があつた。

暫く家を空けさせて頂きます。

突然で驚かれたと思いますが、すみません。

そういえば今日は結婚記念日でしたね。

Saint Germain en Laye のケーキを買つてき

ましたので、食べてくださいね。
冷蔵庫の下の棚に入っておりますので。
慕っております。

余りに唐突であつた。

冷蔵庫の中を確認すると確かに、ショートケーキが一つ入つていた。

私の買ったショートケーキは走つた時に崩れたのであろうか、箱の中で無惨な姿に変わり果ててしまつていた。

そのショートケーキを持って居間に行き、今までありがとうな。と一人呟くように嗚咽した。

とうに日は陰つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4920q/>

胡桃坂

2011年1月29日16時40分発行